どなたかこの少女（美）たちの攻略本をください。

修羅修羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
どなたかこの少女（美）たちの攻略本をください。

【Ｎコード】
Ｎ０８５６Ｘ

【作者名】
修羅修羅

【あらすじ】
神夜柄南高校（神校）、それは2割が一般の生徒、８割がお嬢様やアイドル、異常な頭脳を持したニートなどが集う名門高校。
この高校に入学する伊崎　凶（一般人の類）は、友達を作りたいなどと目標を胸に入学するが入学式当日、生徒会長から浴びせられた言葉は予想だにしなかった。
「この高校に入学した以上、勉強をする必要はありません。勉強な

どこの高校には皆無です。あくまでメインは部活、貴方方新入生は７０種類以上ものある部活動の中から一つ選択し、その部活動でポイントを獲得した故で、互いの獲得ポイントを競います。ね、実に王道的なシステムだと思いませんか？」

そして凶が入部した部活、実にアブノーマルな部活でもあり、誠にアブノーマルな美少女たちまで集った……集って…しまった……。

この物語は常に”非”がつきもの。
そんな一歩外れたルートを行く、普通じゃない少年少女達が暴走する日常を描いた酷すぎる物語。

禁則事項多数、異常者続出、危険な依頼、危うい修羅場！？とにかく悲惨なスタイルラブコメディ！

プロローグ

誰にだって、小さな秘密が一つや二つくらいあるだろう。

でももっと過度な秘密を持ったことはあるだろうか。

俺にはある。その秘密がバレれば周囲の目線や自分に対する見方が変わってしまいそうで怖い、だからこそ秘密にするのだ。

でもその秘密が実際にバレたとき、バレないように事を済ますにはどうしたらいい？

暴力で口封じ？金の力を借りる？方法は多彩だけれども、結局はどれも悪質じみたもの。

だから俺達は、信頼を作った。

俺達が抱える秘密は互いに秘密と化して。

伊崎　凶

朝五時。

おそらく、大体の国民の皆さんはまだ深い眠りについている頃とする時間帯。

しかしそんな早朝に、自室でアニメボイスで目覚めようとする中学生が一人いた。

ベットのそばに置かれたデジタル時計が唸るまで残り5秒ときた。

5……4……3……

2……

1……

0

「あっさだよー！あっさだよー！早く起きないとぉ～ルンルンがおしおきしちゃうぞぉ！」

自室に響くアニメ声にベットに、大の字になっていびきを唸らす凶もさすがに目を覚まさずにはいられない。

「うぐ、あふあぁぁぁ～うぅ～ねむ……」

目覚ましを止め、あまりの眠さに再度ベッドに潜ろうとするが瞬間、

凶は何かを悟ったように自分の頬を両手で強く叩いた。

「うっ、だめだルンルンが待ってる。例え死んでも起きなければ、今行くよルンルン！」

呪文の様に何か呟いてすばやく自室を出る、少し角度が高い階段を下ってリビングに向かう。

リビングは明らかに無理やり設置しただろうというような大画面のテレビが置かれてある。

何ゆえ、健全な男子中学生朝五時に萌えボイスで起床するのかといえど理由は一つ。

「なっ！か、神を拝むために必要である機会洗脳機器がないだと！」

そう、これから毎週金曜日午前五時十五分に、全国の不特定多数の幼女（3歳児～6歳児ぐらい）たちがおそらく楽しみにしていたであろう番組「魔女魔女少女★ルンルン♪～目覚めよ幼女たち～」の第二期が本日開始されるのである。

「くっ！天使が目覚めるまで残り十分といったところか！それまでに機会洗脳機器を探さねば！」

アニメ開始まで残り十分。

リモコンの行方不明。

「くそぉぉぉ！どこにいきやがったぁぁぁぁ！誰が隠したぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

伊崎　凶。

普段はおとなしい一般な学生（中学三年生）なのだが、実はこの男、可愛いものが大好きという密かな秘密がある。

そのため、可愛いキャラが出てくるアニメや、他にも可愛い動物、物、とにかく可愛いと自分が思ったものなどを好む。

「くそ！誰が隠したぁぁぁ！出て来い！出て来い！このクソビッチどもがぁぁぁぁぁ！」

凶の両親は母がイギリス人で父が日本人のハーフ。ちなみに息子である凶の顔つきはどうみても日本人寄りだ。

母は自国に対する想いが強く、家族イギリスに住むことに決めたのだが、当然イギリスの小学校に通うことになった凶に大きな問題が生じた。日本人のハーフなど当時イギリスの学校ではとても珍しくそのためか周囲に対する差別やイジメなどが勃発し、これに頭を抱えた両親たちは凶を日本で住めるよう、父の祖母が面倒をみてくれるということで父の実家に引き取ってもらうことにしたのだ。

しかし、去年祖母が他界。

ということで……

「早くでてこいやぁぁぁぁぁぁ！誰がリモコンを隠したぁぁぁぁ！」

現在、凶は一人暮らしである。

機会(リモコン)洗脳機器を探すこと五分。

リモコンを隠した架空の人物を作り架空の人物を探すこと二十分。

すでにアニメが放送され五分が経過している。

テレビの真上にあるアナログ式の時計を見た凶は絶句した。

そして土下座した。

「お願いします神よ、お願いですから時間を少々お戻し願います」

この吐き気が絶えないくらい気持ち悪い少年は可愛いものを目にすると頭にあるスイッチが入る。突如、中二病になり言動などが意味不になったり周りがみえなくなったりなどとの症状の陥ってしまうのだ。

さすがに馬鹿げたことをしていると我に返ったのか凶は、冷静に考えた。テレビ本体に付属している電源、チャンネル、音量などのボタンの存在に今更気付き、ため息をつきつつも電源を入れ、チャンネルを操作し番組に合わせた。

魔女魔女少女～魔女魔女少女～メルメルメルルン！丁度オープニングのようであった。

「きったぁぁぁぁぁぁ！新ＯＰマジ神じゃん！ちょっ、これやばいって！やばい鳥肌とまんねぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

一度は正気に戻りつつも、スイッチが入るとまた残念な人格に変わってしまう。

二十分ぐらい経ったところでアニメが終了し、凶も学校に行く準備に取り掛かろうとしていた。

と、そこで。ピンポーン　ピンポーン　ピンポンピンピンピンポーン　とチャイムを連打する音が鳴り、こんな朝早くから誰だと少々の迷惑に不機嫌になりつつも仕方なく玄関へと向かう。

カギを開け、ドアをスライドさせ外の様子を伺う。だが、外には人はおらずただ小鳥が電信柱で鳴いているのが見えただけだった。

「こんな朝からピンポンダッシュ？はぁ～若い子はすることがちがうねぇ～」と吐きつつもただの悪戯だと思い若干のストレスを感じつつもまた学校に行く準備に取り掛かる。

一人暮らしから約半年だが、料理などは祖母から時たま身につけられていたためそれなりの物は作ることができる。

一人暮らしとは予想以上に大変なものであり、それでもなんとか生活している凶は部活を辞めてまでもの始末までしたまでだ。

部活は体を少し動かす程度にやっていたが剣道部という場で数々の成績を修めていた。

今はあまり使い道が無くなった以前祖母の寝室として使用していた和室のへやには凶が得た部活の賞状などがほぼ３６０度に飾られているほどだ。

「今日で中学校も最期か」

ポツリと呟いた凶は冷え切ったリビングで出た白い息を見つめた。

今日は卒業式、そしてまた、そのメインである凶も卒業生だった。

はっきりいってこの三年間、あまり良いことが無かったし別に何の非情も湧いてこない。

朝食を食べ、弁当を作り、征服を身に付け、決まった時間に家を出て、バスに乗り、学校へ向かう。

今日もまた日々変わらない日常が始まる。でも日常に非はいつ訪れるか分からない。

この時はまだ、予感も予兆さえも掴めやしなかった。

破壊神

今日をもって中学を卒業する凶は、いつものように教室の扉を開けた。

教室の扉を開けた直後、目に入る光景はいつもと少し違っていた。

征服に作物の花を身に付けて、中学最期の時を惜しむかのように会話に勤しむクラスメイトがそれぞれのグループを作り、口を動かしていた。

扉が開いた音に気づいたのか、教室内にいるほとんどの生徒が会話を中断し、こちらに視線をやる。

瞬間、これまで賑やかだった教室内の空気が一瞬にして凍り、凶はいきなりの黙秘権の所得に戸惑ってはいなかった。

クラスの皆が、こちらに視線を向けているが凶は挨拶の一つもせずにただ無言を貫いていた。

かなりの気まずさに、そろそろ空気の限界かと思われた頃、空気が読めるのか、それとも勇気があるのか、絶妙なタイミングで何事もなかった様に「それで…さ……」と、友達との会話の再開を試みる一人の男子生徒の発言に、徐々に教室内はその生徒が得たチャンスを水に流すことなく凶以外のクラスメイトはそれを境に再び互いの会話を再開するのであった。

嫌われているかもしれない、でも避けられているのは確かでこの中

学三年間、生徒と話すのさえレアだった。

でも俺は、それでよかった。

この現実を望んでいたんだ。

自分がこういう世界を、作ったんだ。

俺は自分の趣味（秘密）を人に知られたくないという想いが強く、友達という関係性を避けてきた。

その結果がこれだ。

友達を作れば、個人の趣味などを通して会話や遊びに関連することが多いだろう、でも俺の場合、俺の趣味と同一する人物がこのクラスメイトの中に一人たりともいるとは思えない。

しかも俺は、趣味＝秘密というつながりだから人に趣味知られる訳にはいかない。

だから、俺が何故友達を作らないかなんて、とても簡単だ。

秘密を知られるのが怖かったのだ。

秘密を知られ、避けられるよりも、秘密を知られずに避けられた方がまだマシだろうさ。

胸に花を付け着席して、ため息、ただ教室の時計を眺める。

時間が経つのはなんでこんなにいつも遅いんだろ。

卒業式という行事以外、何もいつもの日常となんら変わりないのだ、たとえ今日がこれまで学校生活を過ごしてきたクラスメイトとの日々が終わっても、ろくに生徒の名も覚えてない自分には卒業式を共に悲しむ権利さえ無いのだから。

式、3時間ただボーッと座ったままで自分の授与の出番が来ればステージにあがり卒業証書を受け取るだけ。

本来ならば卒業生にとって少しはほろ苦い思い出のメモリに刻まれると思うが、凶だけがなんの情も感じずに、いつもの日常の一つとして捉えていた。

◆◆◆◆◆

一人薄暗い部屋で、凶はただリビングのソファにもたれてかかっていた。

ただ、胸の中で渦巻く一つの大きな雲が晴れない。

「この中学三年間、俺は何をしてきたんだ？部活動だって剣道で全国に出場したし、勉強だって成績の良いほうだ、規則違反とか社会の法に触れてさえいない、いたって安定した中学校三年間だったじゃないか……」

しかし凶は何か不満だった、何かが足りないと感じていた、何かが違う、じゃあその何かとはなんだ？

これまで三年間、何か普通ではない事があったか？

直後、脳内にこれまでの中学校生活の日常がインプットされる。

足りないもの、欠けているもの、「そうか……」

どれだけ部活で良い成績を収めたとしても、テストに向けどれだけ良い点数が取れても、この中学三年間……全く、ちっとも、

楽しくなかった。

「……ハハッ」笑える、なんで今更、「なんで……気づかなかったんだろ」

決して、友達など、相談相手や信頼できる人など作らないと決めたあの日から、自分は必要な何かを失っていたんだな……

「……っく……そ……」

目の前にあるテーブルに置かれた、可愛らしい二次元のキャラクターが描かれたＤＶＤのパッケージ、手にすると今だけは何故か憎い感情が込み上げてくる。

「俺はこんなのに、こんなのに……」

手に力を込める。

とある朝早く、並んでこのＤＶＤを買いに行った自分が嘘の様に思える。

「……く…そ……こんなのに…」

手に力を入れる。

ぐにゃり、手にするパッケージが悲鳴を上げる。

「くそくそっ！なんでなんで！」

憎い、憎い、憎い、自分がこれほどまでに憎いと思ったこと、果たしてあっただろうか。

リビングを駆け出し、階段を勢いよく駆け上がる、２階の自室の扉を乱暴に開ける。

その部屋は自室であり、ベット、机、テレビ、本棚、それと、部屋のほぼ３６０度にかざられた二次元のポスター、多数のアニメのＤＶＤ、どれもが憎い。

「くっそぉぉぉぉ」

本棚を両手でなぎ倒す、無数の本やＤＶＤがぶちまけられる、部屋に飾られるポスターをビリビリと無作為に剥がしまくる、壁に拳を何度もぶつけて手が凄く痛い、テレビさえ殴り蹴り中の部品が飛び出した。

「もうどうでもいい、クソ！俺の三年間を返しやがれ、こいつらのせいだ、こいつらの、俺は悪くない、悪くない、何で、何で」

わずか数分にして足場さえ失われるほどの物が散らかされ、少し落ち着きを取り戻した凶は床に膝を着いた。

「はぁはぁはぁ……っ…」

傷ついた自分の手を見る、擦り傷や青いあざなどがにじみ出ている。

全て分かっていた、全ては自分が悪い、自分はまだ子供だ、幼い、惨めだ、無知だ、だけどそれを通り越して今の自分に一番必要なものは何か、今、分かった、答えが、見つかった。

「次は高校生か、そういえばまだ、人生のスタートを切ったばかりじゃないか、少しばかり自分を変えることができるか試してみるとするか」

黒歴史に残る午前の出来事

朝五時、何故か目覚まし時計の力も借りずに起床した凶。

普通なら何かしなければならないことがある限り、こんな時間など通り越して休みなら午前中はずっと寝ていたいのに。

「なんで起きたんだ？」

いたって普通な部屋で目を覚ます、ベット、机、空な本棚、テレビは……ないけど…

でもとりあえず、何故起きたのか俺は分かった、今日は金曜日、残り15分であのアニメが始まるのであろう。

昔の記憶、いや、つい2週間前の記憶。俺は中学校可愛い物好きとしてデビューしたけど友達を作れなかった、だから俺は高校生デビューに友達を作ることを目標に頑張りたいと思うのだ。

一度起きたら寝れなくなった、というスキルを持つ人間は数多くいることだろう、俺もその一人だ。

リビングに足を運ぶと無性にテレビをつけたくなった、いつも思うが人間の理性とは心情とは本当に複雑だなと感じる。

おもに自分が。

いや、この表現はおかしいか、あまり人と接したことがないからな、訂正すると、自分はそうだけれども他の人間はどうなのであろうか、

うん、いや、うん、きっとそうなのであろう他の人間もきっと……
きっと……きっと……

な、なんか可哀想、俺……

「と、とりあえずこういうのを考えるのは人と接してからの方が良いな……」

ふと、テーブルに飾られた写真たてが視界に入る、そこには凶ともう一人、横に立つ凶よりも背が少し低いだれかが写っていた。無論、心霊現象ではない。祖母だ。

唯一、秘密と化していたあの趣味を知られてしまった者ものがいる、それも祖母だ。

祖母はつい一年前に他界してしまったけど、それでも俺の趣味を受け入れてくれた、2年も同じ家で同居していれば自分の趣味（秘密）なんか知られてもおかしくは無いだろうに、バレたときは動揺したなぁ。

それでも俺の趣味を受け入れてくれた祖母には感謝している、祖母は何も俺に対して愚痴など吐かなかった、俺がどんな趣味を俺が抱えていようと、一度も友達を家に遊びに連れてこなかったことも。

剣道部の全国大会ではわざわざ会場まで年老いた足を運んでまで観に来てくれたくらいだ。

とても誇りに思っているし、尊敬している。

それに、本当は分かっていたのかも知れない、友達が遊びに来ない理由も……

ピッ　機会洗脳機……いや、リモコンはどこだったかな。

「おっ、あった、あった、誰も隠していないみたいだな……」

……っ、だめだ、だめだ、この間の俺はもう捨てたんだ。

これから、十分注意しないといけないな。

マシなテレビ番組がないかチャンネルを回すと一瞬「魔女魔女」とか聞こえたが空耳ということにしておこう。

時刻は9時、眠りから覚めて4時間後、そろそろ朝食の準備をしようかというところ……

ピンポーン

と、唐突にもチャイムが鳴った。

「ん？珍しいな訪問なんて、回覧板かな？」

と、玄関に行こうかと足を進めようと思った直後、脳に電流が流れたように思い出した。

毎週金曜日、つい三ヶ月前あたりからそれは、やってきた。（あのアイスホッケーマスクさんではない）

そういえば、今日は金曜日だったか、なら、またあのピンポンダッ

シュだろう。

ピンポンダッシュ、それは知人や知らない人の近所の家のチャイムを用も無いにも関わらず鳴らしてそのまま逃走を謀るというもの、実にレベルの低い悪戯だなと俺は思う。

ピンポーン

再度唸るチャイム音。

こうなったら今日は、居留守を越えた無視だ、いつもの様にこんなトラップに掛かる訳にはいかない。

「よし」と、リビングに戻る。

しかし、予想外な展開となった。

ピンポーン「すいませーん、宅急便でーす」

「なぬ！？」

たっ宅急便だと！？なに故、そんなレベルの高い組織さんがこんな腐れた一家に御用など！？いや、ま、ま、てよ、落ち着け俺、普通の国民にはこれが一般的という可能性も無くは無い、しかも今の語尾に付けた「宅急便でーす」って聞いたか俺！？世界的にも珍しすぎるにもほどがあるだろうが！

平成２７年３月２８日金曜日午前９時７分３２秒、俺の　世にも世界的なリアル秘蔵名言集　の歴史に残る一ページがまた追加された。

「うはー、神の名台詞キタコレ！」

一人盛り上がる少年。

ん？しかもよくよく考えるとこれって人と会話できるチャンスじゃないのか？そうだ、これはチャンスだ！

よし、一発宅急便のお兄さんと長時間会話に没頭してしまった伝説でも作るか！

「はいはい今行きまーす」と叫びつつ再び玄関に向かう。

まずは、出迎えるんだから満面の笑みで対応しなければ。

鍵をすばやく開け、すばやくスライド。

出てきたのは、かなりお腹が膨れていた男性だった。

「あの～伊崎さんのお宅でよろしかったでしょうか？」

よし、五、六時間会話に打ち込むぐらい上ネタマシンガントークかましてやる！

まずは第一声が重要だな！それと、笑顔笑顔。

「あっ、はいよくぞご存知で、知的ですね！ＩＱは８万ぐらいですか？それと妊娠おめでとうございます！お腹の中の新しい生命もあなたのような才能溢れるエンジェルの遺伝子を継ぐなんて新鮮なたらこより幸せですね！あっ！あなた様はたらこ唇なんですねなんて、世界的にも珍しいファッション！ジャンル的にはファンタジーホラ

ーですかね！？あと何か一人でメイド喫茶にいってそう！しかも顔にプツプツと黒子がありますね！わーお！黒子で夏の第三角形まで描かれていますよ！ピカソにも並ぶ芸術的なキモカワ顔面して…ま……すね、あ、ははははは……そ、それと、い、い、イケボ……ですね…アハハハハハハハ……」

沈没。

一瞬にして、細菌、カビ、ダニ、が混合したような空気が我が家の玄関を静脈の異世界へと空間移動する。

「……」

凶は無言という名の攻撃を貫く。

対する宅急便のおにいさんは……「は、はんこ……押してもらえ、ま、もすか？」

明らかに愛想笑い一つ盛った精一杯の笑顔で対処してくる。

「は、は、ふぁい」

印鑑を押す。

そして、宅急便のお兄さんは家を出て行った。

……

「どこで間違ったあああああああああああああああああああああああ」

ツッコミ役が今、凄く欲しい……

１８０度間違えた、初対面の方にあの仕打ちは論外だったな、世界観さえ数キロ差があったかもな。

「俺、駄目だな」率直に思った。

まず妊娠は失言だったな……

俺に性別の認識能力も出来ないトカ……

女って可能性もあるけど……と、渡された荷物に付属している用紙にも　配達者：井上　大吾朗　と記されていた。

両親は焼酎好きなのかな、って、もうよそう……

ああ、一人で舞い上がってた3分前が馬鹿みたいだ。いや、馬鹿だな、だな。

おっとあまりにも今のがショックですっかり忘れてたな。

「ていうか贈り物とか珍しいな、誰からだろ」

再度気になる人物を確認するため紙を見てみる。

それは、父からだった。

「親父からか、何だろ」

早速気になるのでリビングまで運ぼうとするが……

「うっ、お、重い」

重すぎて持ち上げられない、一体何が入ってるんだ、かなり大きいし、大吾朗さん力あるな……

「しゃーない、ここで開けてみるとするか」

ビリビリとガムテープを剥がす。

すると正方形で包装された何かが見えた、そしておまけに二枚のメモ用紙がでてきた。

「なんだろ」

それは両親からの手紙だった、メモ用紙でご苦労様です。

一枚は母からで、内容はこう記されていた。

キョウヘ

ヒサシブリデスネキョウクン、ゲンキニシテマスカ？ハハワ、トテモトテモゲンキダトオモウヨ。ソレニシテモニホンゴッテ、ムヅカシネ～ハハワイギリスジンダカラ、カタカナベンキョウシテイマス。カクカクデメンゴ～

ソレト、タイセツナホウコクガ、アリマス、コノアイダ、チチガ、ニュウインシマシタ、ムネカラデルチチジャナイヨ、ドウヤラ、オ

ナカガバクハツシテシマッタヨウデス、タイヘンデスネ～（ワラ）

シンパイシナイデネ～

バイバイ　ワタシノムスコ、ソノ１

「えええええええええええええええええ」

「えっ何、親父入院してんの！？爆発！？え？えええええ？しかも（笑）って冗談とホントなのか理解できん！それに、最後の私の息子その１って意味深にもほどがあるだろ！その２がいるのか！？その２が！？こ、怖い！これほどまでに息子を心配にさせる文章があっただろうか！？」

よし次は親父だ。

気を取り直して、お次は日本人としてのと息子に対しての良く理解できる適切なそちら（イギリス）のご報告を頂こうじゃないか！

凶へ

これ食え美味。

父より

「ひっでえええええええええええええええ」

七文字はないだろ親父、七文字は！

泣きたい。

過去に息子をこれほどまでに失望させられる文章があっただろうか。
無かったと願いたい。
「はあああぁ」
ため息。
とりあえずこれ食えってことは食い物なんだな、ま、今食べる朝食に丁度良いか。
さっそく、包装に包まれた紙を破いてみる、すると、缶詰だった。
「これまた予想外なサプライズだことぉぉ！」
か、缶詰って贈り物に用いる物として果たして適しているのか？
まあいいや、食えるなら、もうなんでもいいや、どうでもいいや……
極度の失望感に満ち溢れながらも、大量にある缶詰を取り合えず朝食用に一つキッチンにもっていくことにした。
「イギリスだからな～なにが食えるんだろ」
特に食べ物の中身は気にせず缶きりで缶詰を開封する。
直後、どこかで嗅いだことのある異臭が鼻を誘った。
小皿に中身を開けてみるとそれは正体をあらわにした。

茶色いドロドロ、もう商品名がそれでいいんじゃないかというくらいこの場合、最も分かりやすい表現だと思う。

その正体不明のドロドロの異物ををスプーンですくってみる。

「う、な、なんか口にしたくない……」

しかしイギリスという他国、日本とは食す食べ物は大幅に異なるのかも知れない。

「しゃーない、食うか」

パクリ

一口口に入れてみると……こ、これはいけるかもしれない、口に入れた瞬間、なんというかジューシーなお肉？の甘味がしてとても香ばしい。

「ナイスだ親父」

「でもホントに何なんだろなこれ、」

と、ここで初めて缶詰のパッケージを見てみる。

「んん？」

そこには犬の画像が載られていた。

「んん？ということは、犬の肉か？ふーん世の中には色んな肉があ

るなー……って、んなはずねだろうがあああああああああ」

ドッグフードだった。

そしてそれを悟った。

瞬間、吐き気と嘔吐の連続に息が詰まる、やばいと思いトイレに全力疾走。

「うおえええええぇぇぇぇぇぇぇぇ、死ぬ、死ぬ、いっそ珍殺してぇ！」

トイレで３０分間喚いていた。

そういえば、母は親父が入院してるとかいってたな、もしかしてお腹が爆発ってお腹を壊したってことか？

だとすると、検討がつく、親父はこれを食ったんだろう、送られてきた手紙でもこのドッグフードを美味だとか一文で絶賛してたからな。

くそ！最悪な一日になりそうな予感……

俺は、この短時間でしった事が二つある、

それは俺の両親は俺が思っていたよりも、馬鹿であったことと、

ドッグフードはとても美味しいということの、二つだ。

黒歴史に残る午後の出来事（登校日）

午後。

これほどまでに憂鬱になった午後の時があっただろうかというくらいに鬱だっだ。

人と接するということが、こんなに大変だったとは……

思い知らされた……

「さて、暇だな……」

そう、凶は暇だった。

こういう場合、普通なら友達とか家に誘ったりして遊ぶのだろうか、しかし俺にはその友達がいない。

ゲーム機で暇を持て余すという方法も一理あったりしたのだが……この手で、破壊してしまった……あの時は感極まりすぎたか……罪のないゲーム機まで破壊するんじゃなかった、俺のアホ。

高校に向け勉強という手段もあったが、なんだかせっかくの休日に頭を回すのもどうかと思ったので却下。

ああ、一通り思いつく案が次々に削除されていく……

ホント、何しよ。

直後、「おうえええぇぇ」

嘔吐が襲った。

「っう、まださっきの惨劇が……」

犬に失礼だが、今日の昼食はホントに大変だった、おかげで当分食べる気もしない。

思い出しただけでも吐き気が……

おうぇ

ああ、もう午後の色々あったことは忘れよう……

今日はきつい一日になりそうだ……

「あっ、そうだそうだ朝刊」

いつもなら早朝いち早くポストから取り出すのだが忘れていた、ホント色んなことがありすぎて。

外に出ると少女がいた……のは気のせいだろうか…うん、気のせいだ、きっとそうだ、ありえん。

ドアをスライドして開けると我が家の目の前に、一瞬、一瞬、金髪の大きい眼鏡をかけた少女のような人物が「やばっ」みたいな声を上げながらどっかの高校の制服姿で俊足で過ぎ去っていった…という構想を今、目にしたような気もする……気ね…気…

幻想ですね、そうですね。

馬鹿馬鹿しいと思いつつ行動に移る。

外はミストみたいな優しい雨が降り注いでいた。

ポストから朝刊とチラシを取って、「パシャ」とって、撮って、って！

シャッター音、カメラや携帯で写真を撮るときになど使うあの音……が、今耳にしたのだが……

いや、もちろん俺じゃない、何故に今この場で写真を撮る必要性があるというのだ、断固否定しよう、俺じゃない。

「や、やば！」

「ん？」今なんか可愛らしい声が聞こえた気がするのだが……

いや、待て俺、幻聴だ、今現在ここには誰も居ない、もしかしたらその辺に隠れている誰かがいたりして……

んなはずがない、なかろう、幻聴だ、そう「幻聴だ」「なっ！結構イケボじゃん！」幻聴…？ですかね…？

また聞こえたような気がしたが、きっと幻聴だ、幻聴の男なのだな俺は！

結局、全てを幻聴で終わらせてしまった俺だが、たとえ家の周囲に

少女がいたとしても別におかしい事じゃない、幻聴でも現実でもそこにいたとしても知り合いという可能性は無い、ゼロに等しい、俺に用があるわけでもなかろう、近くでどっかの誰かとアメトークしてたんだろ。きっと……

ああ、で、結局何をしよう……

現在午後1時２０分。

暇。

鬱。

嘔吐。

幻聴。

どうしよ。

！！思いついた、こういうときは掃除だ！そういえば最近リビングの掃除をしていなかった、忘れてた！

リビング全体を見回す。

まずは……本棚でも片付けるか…

…と、結構奥が深い随分放置しておいたリビングの本棚の本を取り出していく。

パラ

埃とともに何か落ちてきた。

「ん？」

何だこれ。

どこかでお目にかかったような書類みたいなパンフレット？がでてきた。

何だっけこれ……と、床に落ちた謎のパンフレットを拾う。

「私立神夜柄南高校？」

んん？、って「俺の行く進学高校じゃん！」

私立神夜柄南高校、凶が住む都市の中ではとても優秀で高貴な名門高校である、どうせ受からないだろうという気持ちで受けたこの高校、驚愕だったが凶は受かった。

こんな気分展開みたいに受けて受かってホントそれで良いのだろうか、この高校に入る資格があるのだろうか？実をいうとこれは中学の先生に薦められて受けたのだ、自分の意志ではない。

”君なら絶対受かる”……と。

確かに成績は良かったが……

まさかほんとに受かるとは……

しかし、決まってしまったものはしょうがない、最後まで精一杯尽くすべきだ、と、俺は思う。

それに、今は目標がある、”友達を作ること”あまり人と接したことが無いためにハードルが高いかもしれないが、この高校で頑張りたいと思う……

……と忘れていた、とても重要なことを忘れていた、あはははは……

友達？作れるのか？この高校で……？まだ他の高校の方が望みがあったんじゃないか？

もう一度紹介しよう、この私立神夜柄南高校、略して神校。この高校は大きく、一般の高校とはズレているところがあるとしても有名だ、まずは生徒、この高校には一般の俺みたいな生徒は２割を切る、そしてその８割が……

お嬢様、極度のニート、アイドル、貴族、科学者や歌手などこれからの将来に大いに期待されている特別扱い組な勢ぞろいという訳であって、友達を作るのにはあまり適した環境ではないといえます……

ああ、ＢＡＤ　ＥＮＤ　が見えた。

高校のパンフレットをぱらぱらめくっていくと、ピンクの良い感じ質でできた用紙がでてきた。

「今度はなんだぁ？」

それは入学案内だった。

「おお、こんなとこにあったのか入学案内！」

長い間姿をくらましていた物がこんなとこにあったとは。

何か重要な用紙なのだろうか、紙の質が良い。

さっそく用紙見る。

それには、少し太字で入学案内と記されており入学式について詳細に説明したプリントだった。

「入学案内じゃんか、こんな大事なものこんなところに……危ない危ない今見つけなきゃ入学式を危うく欠席するところだった……」

やはり入学式というものは、新入生がメインに行われるもの、学校の説明や勉強から部活まで、あらゆることを詳しく語ってくれるものだと思う、必要不可欠で重要な式だ。

それに、入学式なんかに休んだらたちが悪い、なんせ名門高校だ、お互い顔も知らない生徒同士が初対面する日でもある、友達を作ることを目標としている俺にとっては始まりの日、いや、原点の日といっても過言ではない。

とても重要な日だ。

そして、入学日を確認する。

「で、肝心の入学式はいつだろ？」

今日だった。

……

起立。

前進。

リビングから窓を見る。

「今日の空は……青いな……」

ただ、そう呟きたかった、楽になる気がした、開放される気がした。

そう、用紙にはこう記されていた。

入学式：３月２８日（金）午後２時

リビングに飾られた時計をゆっくり見やる。

現時刻午後１時３５分。

大量の発汗で目も発汗しそうだ。

「うあああああああああああああああ」

叫ぶ俺。

涙目俺。

着替える俺。

走る俺。

チャリに乗り、全力で漕ぐ俺。

濡れる！俺。

騒ぐ俺。

焦る俺。

止める降りて拾う俺。

再び漕ぐ俺。

安堵のため息を付く俺。

今日はいろんな俺がいた。

こんなに暴走したのは初めてだ。

でもしかし、なんだかんだで学校へ着いた。

足の感覚が無いくらいに疲れたけど。

でもしかし、途中で濡れたのは雨が降っていたからだ、決して勘違いしないでほしい。

でもでもしかし、途中で騒いだのは自転車のサドルが外れたからである。

それでもしかし、止めて降りて拾ったのは道草にほぼ全裸のおねえさんが表紙の雑誌が落ちていたからではない、決して勘違いしないで欲しい。

校門に入ると新入生を出迎えてくれる先生がいて、自転車置き場を教えてくれた。

全く気が利く、普通の高校は皆そうなのだろうか？

日本に来て良かった。

現在１時５０分。

少し余裕はあるが、のろのろしてはいられない。

すると、少し急いで指定された置き場え向かう際、後ろから走ってきた女子生徒と肩と肩がぶつかるくらいに軽い接触をした。

「おっと」

危なく自転車ごとコケそうになった。

ぶつかった女子生徒はというと、「す、すいませーん」と、こちらを振り向きもせずに走り去っていった。

「随分急いでるなぁ」

ん？

ふと、進もうとしたら足元に花柄のピンクの可愛らしいハンカチが落ちていたのに気づいた。

これは、おそらくさっきの接触で……

どうしよ、もう行っちゃったし…顔も分からない、後姿を見る限り黒髪のストレートの女子といった感じだろうか。

でもそんな子、一人だけとは限らない。

ハンカチに名前は……

しっかり見てみたが何も書いていない。

ん～仕方が無いとりあえず預かっておくか。

見てしまったもの、そのまま放置など俺にはできない。

そしてそのハンカチを征服の胸のポケットに凶はしまった。

体育館。

広すぎる。一目見たときに思った感想がこれだ。

在校生、新入生、計６５８人が十分なスペースで埋まってもまだ６

割以上はスペースがあるくらいだ。

入学式の式が始まっても周りの生徒さえ、まだこの話題で持ちきりだ。

こそこそと内輪声で喋っている。

しかしそんなつまらない校長の長話は終わり、周りの俺たちにそんな話題を一回り上回ることが起きた。

「え～続いて、本学校の諸説明、生徒会長」

この学校の生徒会長か、一体どんな人だろう。

と、ステージ上に出てきたのは長い銀髪の見るからにスタイル抜群の美少女だった。

何か自分とは違う眩いオーラを放っているように思える。

すると、隣の生徒二人がなにやら喋っている内容が耳まで届いた。

「ねぇ！生徒会長よく見てよ！もしかしてあれリオネじゃない！？」

「え、ウソ！この間テレビに出てたあの！？ホ、ホントだ……ウソみたい」

テ、テレビに？

凶ももう一度良く見てみる。

そういえば、このあいだ俺もこの人見た覚えがあるぞ、テ、テレビで……

まさか高校生でこの学校の生徒で生徒会長だったとは……

予想以上に凄いなこの学校。

「ええ、新入生の皆さん少しばかり静脈に」

萌えボイスばりな声で体育館は一揆に静まり返る。

「改めまして、新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。三年の生徒会長、倉井　さえです。テレビの中では……リオネといいます。ん、まぁ、では、時間も限られているのでとりあえず簡潔にこの学校の醍醐味などをご説明させていただきます」

少し変わった名門高校として有名なこの学校、特に生徒だけではなく、この学校の中身が相当変わっているのだというが、世間には何故かあまり知られてはいない、一体いかなるものなのだろうか。

「少し長くなりますが、大切な話ですのでお付き合いください。とりあえずこの高校の生徒のことですが、卒業生の４割以上がテレビの世界や王手会社の社員でしたりとで就職率１００％を誇るほどの実力を挙げています、ですが残りの６割は皆さんなんだと思いますか？」

なんだろう、でもまぁそれなりのところへ就けるんじゃないのか？なんたって就職率１００％だし。

「普通。これが答えです。一般の人方が普通に面接して普通に受か

って、高くも安くもない給料を貰い普通に暮らして普通に死ぬ。これが４割の皆さんです。別に悪くないんじゃないか、と思った方もいるかもしれません。ですが、一度の人生、普通に生きるよりも少しでもお金を儲けて、楽をして、したいことをする。それがすぐ間じかにあったとすれば、皆さんどっちの人生を生きたいですか？」

そうか、俺だって大金持ちになったりして一般というものから抜け出してみたいという気持ちは無くはない。

「私は迷わず少しでも裕福な人生を生きたいですよ。皆さんもきっとそうでしょう。そして、それを１分の４の確率で実現できる高校がこの高校の最大の特徴なのです。」

目の前に……一歩進めば届く距離じゃないか……凄いな、俺、この学校に来れて良かった……

「重要なのはここからです。この、６対４は確定な数字なのです。つまり、６以上の生徒が成功を歩める訳でもなく、４以下は残念な道を歩むことに確定なのです。１００人いたとすれば、６０人だけしか到達できず、４０人だけ到達できないということです。お分かりですかね？」

それは、かなり厳しいな。みんな同じレベルでも絶対そこから６対４に割れなきゃならないのか。

「そして、それを左右するこの高校の醍醐味であるものとは」

勉強か……普通に考えてそれ以外に考えられれん。

「部活です」

瞬間、この生徒会長の一言により体育館内が新入生によりざわざわとうるさくなる。

「皆さん静かに。ただしこれは文化系の部活に限ります、体育系など全く持って皆無です。」

マジかよ……勉強じゃないのか？

生徒会長の諸説明は続く。

「最初に言っておきますとりあえず、この高校に入学してもらった以上、勉強などする必要などありません。」

え……

「全ては部活によって左右されます、数学やら国語やらとはもう中学でおさらば、ということですね、テストやら進学の道も存在しません、勉強が目的で入学したとか勉強がしたいという方はどうぞ退学やら塾に行くやらして下さいね。」

……

体育館内は誰一人驚愕で無言だった……

「そしてですね、部活で何を競うのかというと…ポイントです。」

ポイント？

「ポイントは各部活で獲得します、獲得の仕方もそれぞれ部活によ

って異なります。また、学校の規則や社会のルールを破った場合等はポイントが削減されます。気を付けて下さい。部活の種類は７０種類以上あり、もちろん入れる部は一つまでです。そしてこれは個人の戦いです、部活ごとの戦いではないのです、そこを注意して下さい。たとえ友達が同じ部であったとしてもそれは敵同士です。そして２ヶ月に一度、全学年全員をランキング順にして報告します。ちなみに、私は現在８位です！」

ランキング順にって……最下位とかなったら恥ずかしいなそれ……

「まぁ、もっと詳細には来週の月曜日に説明しますので、とりあえず今日は７０ある部活が詳しく記してあるプリントを配っておきますのでそれを見て月曜日まで決めてくるようにお願いします」

「ええ、これにて入学式を終了とさせていただきます、お疲れ様でした」

前代未聞だ……

私立神夜柄南高校、それは俺の予想を斜め上を遥かに上回り、まだ理解しきれない状況の中でもただ、

とんでもなく普通とはかけ離れたアブノーマルな学校生活を送ることになることだけは確かに決定事項というだけだ、ただ、それだけの、それだけのことであ……る……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0856x/

どなたかこの少女（美）たちの攻略本をください。

2011年11月17日17時57分発行